



コンテンツ紹介

p.2 図書館と共に

元学長・文学部国文学科 教授 江藤 茂博

p.3 新入生にお勧めの本

文学部国文学科 准教授 奥川 育子

国際政治経済学部国際政治経済学科 特別任用准教授 町田 なほみ

p.4 東新宿～四谷文学散歩／作家のおやつ巡り⑬

p.6 古典籍を探す・調べる・デジタル画像を利用する

国文学研究資料館
「国書データベース」

p.7 本学所蔵資料紹介 三島中洲書幅
書評キャンパス

p.8

本学教職員著書紹介

『日本語における一字漢語サマ名詞
の研究：「式」と「体」の用法史』

文学部国文学科 教授 島田 泰子



九段

館内企画展示「柳田国男 生誕150年
『日本民俗学の父』ってどんな人？」



柏

館内企画展示「古典に眠る、いまの気持ち。
ー日本三大随筆からー」



図書館と共に

元学長・文学部国文学科 教授 江藤 茂博

ある時、源氏物語の研究者故鈴木一雄先生が、子供の頃に近所の図書館に通った話を私にされたことがあった。当時、勤務していた大学で、私が図書館司書課程を設置したいと、学長をなされていた鈴木先生にお願いにいった時のことである。グラウンドが窓の外に広がる学長室でのことだった。先生は、初めて図書館に足を踏み入れた時の感想として、こんなに楽しい場所があるものなのかと幸せな気分になった、と語られた。おそらくは1935年前後の頃の東京市での話である。東京市本郷区のご出身なので、通われていた磯川尋常小学校内の児童図書館(1923開館)の話なのか、小石川尋常小学校内の東京市立小石川簡易図書館(1910開館)の話だったのか、あるいは東京市立日比谷図書館(1908開館)の話だったのか、あいにくその肝心なことを聞きそびれてしまった。先生は自転車で通われたとのことだったので、当時すでに10万冊を超える蔵書を有していた日比谷図書館だったのかもしれない。やがてその図書館で手にされた本の話に移り、さらには菊池寛の「小学生全集」の話題となっていった。さて、どこの図書館のことだったのか、いまさらながら残念なことである。

もちろん、私にとってもまた、子どもの頃は図書館が遊び場のようなものだった。いまは取り壊されてしまった県立図書館の子供のコーナーで、童話集や伝記本などを楽しんでいた。鈴木先生の子供の頃から3、40年後となる私の図書館体験も、おそらくは先生のそれと重なることだろう。公共の図書館に視覚資料や音声資料がまだ無かった時代の話である。そんな図書館に身を置いては、さまざまな本を手に取り、物語を楽しむ時間を、私もそこで過ごしてきた。

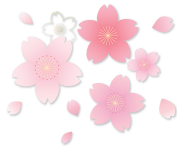
その後も、通う高校の図書室や県立図書館という「楽しい場所」に身を置くことを繰り返していたが、学校で図書委員を任されたことはなかった。映画『Love Letter』(岩井俊二監督1995)や映画『君の膵臓をたべたい』(月川翔監督2017)など、図書館を舞台とした映画を観ていて、自身をそう振

り返ったことがあった。図書館の仕事をする、そのことに考えが及ぶ前に、中学生の頃から私は古本屋に心惹かれていたからかもしれない。

しかし、大学生になり、東京に上京した頃からは、古本屋通いはもちろんのこと、区立図書館では、音声資料(レコード、やがてCD)も貸し出されるようになり、二十歳前後の頃はよくそれを利用した。その当時、私の中では「入門」と題された書物の乱読時代で、学問、スポーツ、語学、遊び、とあらゆる入門書を手に取っていたが、「入門」と題した教養カセットテープなどもあったからだ。すべてを購入するわけにはいかず、図書館からも借りだしては読んでいたのである。いまだに、図書館や本屋さんの棚に入門と題する書名があると、ついページを繰りたくなってしまう。魅力は、初心者に向けての言葉遣いと、難しいことを簡単に説明してしまう語り口の巧妙さである。いまでも、その末裔が、コンビニのラックで売られたりしている。

大学図書館は、やはり大学院生になる前後に利用することが多くなった。教員になって使うこともあるのだが、なかでも一番印象的だったのは、イリノイ大学の図書館で、24時間利用でき、また牢屋を思わせるような個人スペースも利用した。中から鍵をかけて使う、ちいさな部屋であり、防犯上の意味合いで、このような金網部屋が設けられたようである。檻みたいなものだった。また、台湾の大学の外国語学部に併設されていた図書館では、学生たちが外国語をぶつぶつと口にしながらあちこちで勉強していたのが印象に残っている。

こうした長い図書館との付き合いだが、実は、図書館司書という仕事に興味が生まれ、資格取得について調べてみたこともあった。あいにく、学生の私にはとても取れそうな環境ではなかった。後に、図書館についての論文を書いたのは、そうした興味があったからだ。ただ、その論文を活用して、最初的话题に戻るが、今度は前任校や二松学舎で、図書館司書課程を新設することができたのである。



新入生にお勧めの本



文学部国文学科 准教授 奥川 育子

① 『日本語と日本語論』 (ちくま学芸文庫)

著者：池上嘉彦 発行：筑摩書房 2007年 1,430円

② 『日本語を翻訳すること—失われるもの、残るもの—』 (中公新書)

著者：牧野成一 発行：中央公論新社 2018年 858円

③ 『ことばと思考』 (岩波新書)

著者：今井むつみ 発行：岩波書店 2010年 1,100円

私たちは日々の生活の中で特に意識することはありませんが、ことばを通して世界を見たり、ものごとを考えたりしています。では、ことば(言語)が違えば世界の見方も違うのでしょうか。ここでは言語と思考/認知について学べる、お勧めの本を3冊紹介します。

①は、認知言語学の第一人者がさまざまな日本語話者好みの表現を取り上げ、それらを英語・ドイツ語などの外国語と比較し、「日本語らしさ」とは何かということを考察しています。

②は、音・表記・比喩・時制・数の概念など、日本語から英語に翻訳する際に消えてしまう現象を取り上げ、「ウチ」と「ソト」の視座から日本語を捉え直しています。

③は、ことばの獲得が思考に与える影響を豊富な実験結果から示し、「異なる言語話者は、世界を異なる仕方で見ているのか」という問いを認知心理学の観点から科学的に考え直しています。

以上の本を読んで言語の普遍性と多様性について考え、言語を通して「人間とは何か」少しでも理解いただければと思います。

国際政治経済学部国際政治経済学科 特別任用准教授 町田 なほみ

① 『心を揺さぶる！英語の名言』

著者：松本祐香 発行：PHP研究所 2006年 1,320円

一般的に名言集に取り上げられる人々だけでなく、ビル・ゲイツやトム・クルーズといった様々な分野で卓越した功績を挙げた偉人達の名言がまとめられています。新しい生活での迷いや戸惑い、大きな決断などに直面した時だけでなく、日々を過ごす上であなたを支えてくれる「刺さる」言葉が見つかるかもしれません。

② 『日本語練習帳』 (岩波新書)

著者：大野晋 発行：岩波書店 1999年 924円

大学での学びでは、話すこと書くことの両局面でアカデミックレベルの日本語が求められます。日本語が母国語の皆さんには、日々使う言語を深く知り次のステージへとレベルアップするための知識が、母国語ではない皆さんには、これまで学んだことを振り返ることのできる知識が実践的に示されています。日本語に対する再認識や新しい気付きが得られると思います。

③ 『「話して考える(シンク・トーク)」と「書いて考える(シンク・ライト)」』

著者：大江健三郎 発行：集英社 2004年 1,540円

ノーベル文学賞受賞作家の大江健三郎による様々な視点からの講演をまとめてあり、社会・世界に目を向け、自らが発する言葉への向き合い方、入念に言葉を仕上げていくことに対する思いを知ることができます。人間が言葉で何かを表現しようとする時にどのように自己表現するか、すべきかをあらためて考えるきっかけとなるでしょう。

価格はすべて税込 (2026年2月現在)

東新宿～四谷文学散歩

今回は前号で紹介した東新宿から四谷方面に向かいます。

東新宿駅を出発して東へ向かうと、境内を南北に通抜けできることから「抜弁天」と呼ばれている巖嶋神社があります。その手前の角を右に曲がった先に「坪内逍遙旧居跡」①があります。坪内逍遙（1859～1935）は1890年から1920年までここに居住していました。早稲田大学で教鞭を執る傍らシェークスピア作品の研究・翻訳を行った逍遙は、1909年に敷地内に文芸協会演劇研究所を設け、後に日本の演劇界を担う多くの人材を養成しました。

そこから少し進むと、「永井荷風旧居跡」②があります。永井荷風（1879～1959）は父親の意向に沿って実業家を目指して欧米に留学し、帰国した1908年から1918年までここで暮らしました。当時腸を病んでいた荷風はこの家の離れを「断腸亭」と命名し、『断腸亭日乗』と題した日記を綴りました。

南へ進んだ成女学園の正門脇には「小泉八雲旧居跡」③があります。ギリシャ生まれの作家の小泉八雲（1850～1904）は1896年からここに居住し、近くにある自證院の境内の散策を日課としていました。しかし、樹木が伐採されて自然が失われていく姿に心を痛め、1902年3月に大久保へ転居しました。

曙橋方面へ戻り曙橋交差点を右折して四谷三丁目駅を過ぎると、江戸化政期の歌舞伎作者・四代目鶴屋南北（1755～1829）が書いた『東海道四谷怪談』に登場するお岩さんを祀った「四谷於岩稲荷田宮神社」④があります。また、向いの「陽運寺」⑤もお岩さんを祀っていて、境内にはお岩ゆかりの井戸⑥があります。

近くにある「須賀神社」⑦の社殿には、天保年間に描かれた三十六歌仙絵が飾られており、新宿区の指定文化財となっています。また、神社前の階段⑧は2016年に公開された新海誠監督の映画『君の名は』のポスターに描かれたシーンでも有名になりました。

近くの「愛染院」⑨には、江戸中期の国学者で『群書類従』を編纂した埴保己一（1746～1821）の墓があります。保己一は、『大日本史』の校正なども手がけ、1793年には和学講談所を開設して書物の収集と門人の指導に尽くしましたが、『続群書類従』の編纂なかば76歳で没しました。

四谷見附交差点手前を右折すると、「二葉亭四迷旧居跡」⑩があります。小説家・翻訳家の二葉亭四迷（1864～1909）は1880年7月に東京外国語学校露語科に入学し、寄宿舎に入るまでの1年間をここで過ごしました。

今回のコースは急な坂が多く、細い道が入り組んでいますので、スマホで位置情報を確認しながら、気を付けて歩いてください。





作家のおやつ巡り⑬

『巷談本牧亭』で第50回直木賞を受賞した演劇家で作家の安藤鶴夫（1908～1969）は、1953年3月29日の読売新聞の朝刊で、四谷で1953年に創業した「わかば」のたい焼きを「しっぽのはじっこまで、見事にあんこが入っていた」と称賛しました。その日のうちに「交番に、たい焼きはどこだどこだとききにきたそうだ・・・十人ばかりの行列が出来て、老夫婦が、ふうふういいながらたい焼きを焼いていた」※¹ そうです。

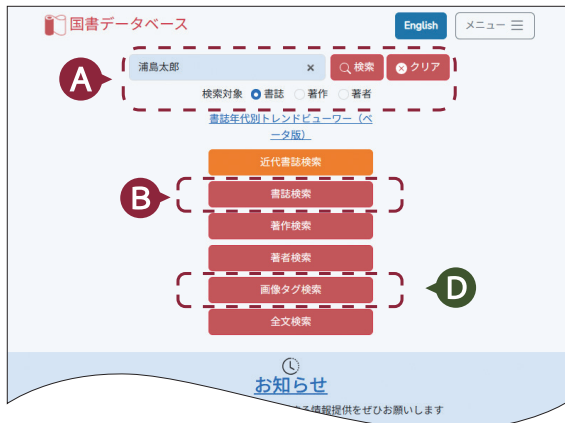
また、小説家としてだけでなく、雑誌編集や着物のデザインなど多彩な活動を行った宇野千代（1897～1996）も、編集者や友人が手土産に持ってくる「わかば」のたい焼きを好んで食べていたとのこと。※²

専用の型でひとつひとつ丹念に焼かれた「わかば」のたい焼きは、香ばしくパリッとした薄皮につぶあんがぎっしりと詰まっていて、行列に並んでも食べたい一品です。場所は上の地図でご確認ください。

※¹『ずっしり、あんこ』河出書房新社 2015年刊

※²『作家の食卓』平凡社 2005年刊





何を調べられる？

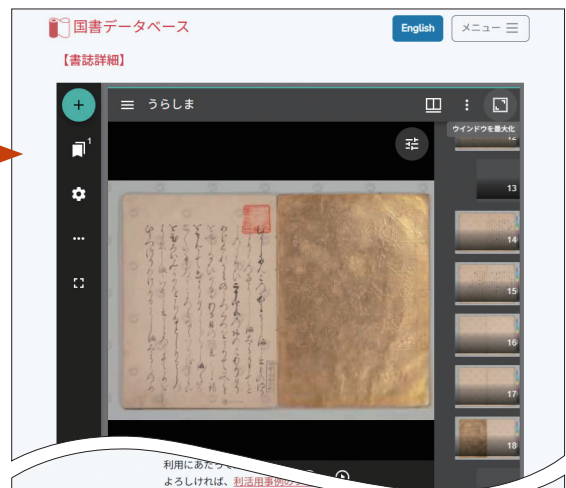
江戸時代以前の書物である「古典籍」約99万件の書誌や、その所蔵機関を調べることができます。そのうち約30万点はデジタル画像を公開しており、ブラウザ上で全ページを閲覧することができます。2026年1月現在

「書誌」ってなに？

書名や著者名、出版年や出版者、ページ数や大きさなどの本の情報をいいます。

基本の検索方法

- A キーワードで検索する**
書名や著者名などの情報が分かっているときは、<検索対象>の「書誌」をチェックして、検索ボックスにキーワードを入力、<検索>ボタンを選択します。
- B 書誌検索（詳細検索）**
書名、著者名、刊年・写年などの項目を指定してキーワード入力したいときはこちらが便利。
- C 検索結果が多すぎる場合は絞り込み機能を使う**
検索結果の一覧画面で、刊本や写本の別、分類（絵巻や和歌、物語など）といった条件を追加して絞り込むことができます。



D 絵が探せる「画像タグ検索」も試してみよう

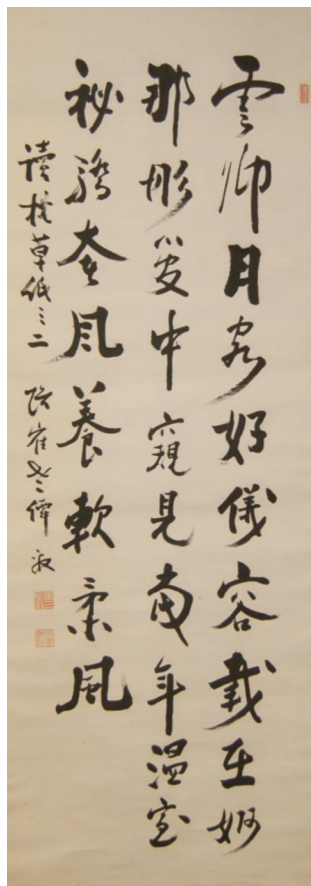
たとえば…
キーワードに「浦島太郎」を入力して検索すると、タグ付けされた画像が表示されます。



本学所蔵資料紹介

三島中洲書幅 讀枕草子之二 明治四十二年

三島中洲（一八三〇～一九一九）：本学創立者。
 明治十（一八七七）年六月大審院判事を退職、同年十月漢学塾二松学舎を設立。明治二十九（一八九六）年東宮侍講、明治四十五（一九一〇）年新帝（大正天皇）の侍講となる。大正四（一九一五）年宮中顧問官に任じられ、一等官に叙せられた。



雲卿月客好儀容 雲卿月客 儀容好し
 載在婀娜彤管中 載せて 婀娜彤管の中に在り
 窺見當年温室秘 窺ひ見る 当年温室の秘
 驕奢風又軟柔風 驕奢の風 又た軟柔の風

高位高官の人々の礼儀になつた好ましい態度や姿が、清少納言のしなやかで美しい筆によつて描かれている。当時の宮中の深奥をうかがい知ることができる。おごつて贅沢な風俗とおだやかで弱々しい風俗を。

（石川忠久編 『三島中洲詩全釈』 第四巻より）

週刊読書人 千代田区立千代田図書館
 本学附属図書館 共同企画

書評キャンパス

書評キャンパスは、大学生がプロの編集者と二人三脚で書評を執筆する企画です。
 書評専門誌『週刊読書人』（2025年3月～2026年2月発行分）に掲載された学生を紹介します。

『週刊読書人』掲載日	書名	氏名
3月14日号（第3581号）	羽田圭介著『黒冷水』（河出書房新社）	渡辺 楓（文学部国文学科4年）
8月22日号（第3602号）	森鷗外著『渋江抽斎』（岩波書店）	山形 悠（文学研究科後期2年）
9月19日号（第3606号）	伊藤計劃著『ハーモニー』（早川書房）	和田 七望（文学部国文学科2年）
9月26日号（第3607号）	北村薫著『空飛ぶ馬』（東京創元社）	正木 照乃（文学部国文学科2年）
10月3日号（第3608号）	三浦綾子著『母』（KADOKAWA）	高野 里奈（文学部国文学科1年）
10月17日号（第3610号）	恩田陸著『蜜蜂と遠雷』（幻冬舎）	毛利 桃子（文学部国文学科2年）
11月14日号（第3614号）	朽葉屋周太郎著『おちゃらけ王』（アスキー・メディアワークス）	野原 泰靖（文学部国文学科4年）
11月21日号（第3615号）	武田綾乃著『愛されなくても別に』（講談社）	佐藤 葵（文学部国際日本・中国学科3年）

2017年度～2023年度…『書評キャンパス at 読書人』

（本学所蔵 請求記号 019.9-S-2017～2023）

過去の掲載
 書評が読めます

書評キャンパスの詳細内容はウェブサイトから

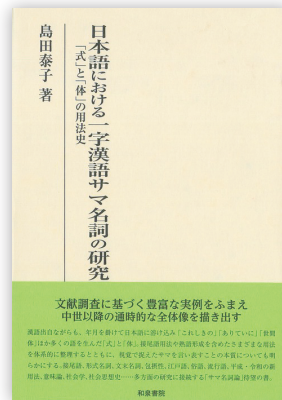
<https://yomka.net/campus-top/>



本学教職員著書紹介

『日本語における一字漢語 サマ名詞の研究： 「式」と「体」の用法史』

島田 泰子 著
(和泉書院、2025年5月刊行)
A5判 432ページ 10,000円+税
ISBN 978-4-7576-1123-8



視覚で捉えたサマを言い表すことの本質をめぐる「サマ名詞」論にして、名詞の形式化・接尾語化・機能語化の具体的事例に関する実証的な記述研究。漢語出自ながらも、年月を掛けて日本語に溶け込み「これしきの」「ありていに」「世間体」ほか多くの語を生んだ「式」と「体（てい）」を中心に、文献調査に基づく豊富な実例をふまえ、種々の用法における意味機能の本質と相互の関連性について解明する一冊である。

私たちが日常的に使う言葉は、しばしば長い歴史を経たさまざまな経緯を重層的に内包する。平安期から令和までの長期にわたる膨大な文献を博搜して収集された大量の実例は、その「経緯（の重層）」を如実に描き出す。

例えば「これしきの」は、本来、似たような他の存在をあれこれひっくるめて言及する表現であった。つまり排除ではなく包含、今日的に言えば“インクルージョン”である。「何々のていで」の「てい」は、漢語という正体も忘れられ、今や“なりすまし和語”のように俗語的な使用も広がっている。「世間体」は、地縁血縁による農村部の閉鎖社会を想起しがちな一般のイメージに反して、むしろ、異質な他者が集まる都市部の論理であった。江戸時代の町人社会で「世間」に向けて“筋を通す”ためのそれは、今日に言うコンプライアンスに相当する——文献日本語史研究の成果が明らかにするこういった「身近なことば」の意外な真実は、巷間に流布する怪しげな言説、とりわけ一般人が安易な連想や漠然とした推測によって紡ぎ出す俗説を、いとも軽やかに覆す。

根拠の乏しいその手のフェイク、世間一般に信じられ、あるいは時に声高に主張される言説は、ネット上に安易に転載されて氾濫し、昨今はそれを丸ごと呑み込んだAIによって拡大再生産的にハルシネーションのハウリングを引き起こしている。本書が厳密な学術的手続きによって初めて実証的に明らかにする言葉の真実は、フェイクまみれな今の時代における言語（史）研究の責務と意義を体現するものでもあろう。

文学部国文学科 教授 島田 泰子

訂正 「季報」第123号4ページ23行目の『破壊』は正しくは『破戒』です。ここに訂正します。

編集後記

「季報」124号をお届けします。

今号では、定年退職される教員の図書館への思いと、本学教員が新生に勧める図書を紹介しました。また、本学の学生が執筆した書評に関する情報も掲載しています。今まで手に取ったことのないジャンルの本にも、ぜひ手を伸ばしてみてください。

作家のおやつ巡りではたい焼きをご紹介します。たい焼きはお店によって顔と体つきがずいぶん異なるので、かじる前に鑑賞するのも楽しいです。(Sh)

二松学舎大学附属図書館
季報
第124号

発行日 2026年3月16日
発行 二松学舎大学附属図書館
(九段) 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
電話：03-3263-6364
(柏) 〒277-8585 千葉県柏市大井2590
電話：04-7191-8758
印刷所 株式会社 サンセイ